

No.30 September 2000

特集 続・フェミニストにとっての宗教

Womanist



フェミニズム・宗教・平和の会

もくじ

特集 続・フェミニストにとっての宗教

沖繩へ行って思ったこと 近藤 和子 1

現代日本のカトリック教会内での婚外子差別 屋代 道子 5

女であること・日本人であること、 黒木 雅子 7

キリスト教という糸で紡ぐタペストリー 黒木 雅子 7

コミュニスト、フェミニスト、クリスチャン 黒木 雅子 7

——わたしの「解放」のステップ—— 黒木 雅子 7

宗教と戦時性暴力被害者の癒し 宋 連玉 17

再び「仏教と『慰安婦』問題」——鶴岡瑛さんの応答に答えて 池田恵理子 18

「もてない女」は如何にキリスト者であり続けたか(二) 金子(真鍋) 祐子 26

女と国家——観念による呪縛

A『古事記』(二四) 河野 信子 30

女のしあわせ・私のしあわせ・それどまり 下村美恵子 32

本の紹介

『女性問題を学ぶ——ある自治体のところから』(下村美恵子著) H 35

『光州事件で読む現代韓国』(真鍋祐子著) 小松加代子 36

『「日本」国家と女』(井桁碧編著) 井桁 碧 36

『現代フェミニズム思想辞典』(ソニア・アンダマール他著) 奥田 暁子 37

編集後記に代えて 山下暁子・小松加代子・奥田暁子 38

沖縄へ行つて思ったこと

近藤 和子

沖縄へ行つて来た。沖縄サミットに対するアピールとしてカデナ米軍基地を「人間の鎖」で包囲する行動に参加するためだ。七月二〇日の「人間の鎖行動」は大成功で、主催者発表、二万七一〇〇人の鎖でカデナ基地を包囲した。私たちは東京から自主的に参加したので、広大な基地を一望できる、俗に言う「安保の見える丘」近くの組織動員以外の市民たちに割り当てられた場所得手を繋いだ。そこに参加した人々はじつにさまざまである。とくに私たちのいたところは市民中心であったし、地元の人が多かった。年代もじつに多様だ。沖縄戦を体験したであろう年代の人々から、子供まで、三世代、いや四世代にわたった。私たちが東京から来たことを知ると、クーラーボックスから冷えた飲み物を差し出してくれた年配の女性は、地元カデナ町のひとで、行動と行動の間には、「ちょっと、家へ」と言つて、信号を渡つていった。同じ町内の人が声を掛け合つて参加したのだと言う。当日の行動は午後二時から始まつて、三〇分おきに三回で午後三時まで行われた。行動の間も、参加者を乗せたバスが続々と到着し、鎖に参加していく。朝東京をたつて那覇空

港から駆け参じた人も多くいた。私たちに割り当てられた場所は基地のフェンスのさらに外側に石の壁が建てられていた。というわけで基地の中が見えないようになっている。何百億をかけて作つた石壁だと言う。これも日本の「思いやり予算」で作られたのだそうだ。前日には沖縄戦の南部戦跡を巡つたので、沖縄が米軍に負けて軍事占領されたのだ、と強く思わされた。

カデナ基地に対する人間の鎖行動には、沖縄サミットに対して南の声や草の根の声を届けようと海外から来ていた様々なNGOも参加していた。彼ら彼女たちは沖縄が米軍基地に支配され、日本の経済力もじつはアメリカの軍事力に支えられたものだと言うことにきづいたであろうか。また沖縄で先進国サミットを行うということは、先進国とくに米国を中心としたグローバルイゼーションがじつは世界一の米軍勢力、とくにその戦略基地として世界最大の沖縄の基地によって支えられているということを世界に知らせたであろう。それが「人間の鎖行動」であった。

沖縄へ行つて気付いたことはもう一つ。教会が目立ったことだった。私たちが泊まつた那覇のホテルの隣は教会であった。カデナやサミット会場の名護へ行く途中でも教会の姿は目立った。事実人口あたりの教会数は他府県より圧倒的に多いそうである。戦後米占領軍とともに宣教師が続々とやつて来た。移動中のバ

スから一段と目に付いたのは安里のカトリック教会であった。堂々たる建物とともに、二〇〇〇年ミレニアムの看板が目に付いた。

今回の沖縄サミットで注目を浴びた問題の一つに南の国の債務問題があった。NGO（非政府組織）の「ジュビリー二〇〇〇」が呼び掛けた南の債務帳消し運動であるが、それはキリスト生誕二〇〇〇年を期に債務の帳消しをというように、キリスト教関係者から起きた運動である。そしてその債務に苦しむ国とはアフリカや中南米など欧米の旧植民地が多い。日本でもジュビリー二〇〇〇に取り組む市民運動もできたようだが、その主体となっている人々を見ると、欧米の植民地政策やその帝国主義的な支配に批判的な運動をしていた人々である。

この債務帳消し運動に取り組んでいるジュビリー二〇〇〇に対する批判もまた多い。これは沖縄でも聞かれたことだが、彼らは南のさまざまな困難を南北の経済格差だけに見えて、軍事的な問題には触れない。さらに私なども感じていることだが、アフリカや中南米で先進国の重債務に苦しんでいる国々はもともと欧米諸国の植民地であった。アフリカなどを今日の悲惨さに追いやった元凶とは、欧米列強の植民地支配であり、人的資源を略奪した奴隷貿易であり、欧米の資源略奪侵略であり、米ソ冷戦時代のイデオロギー代理紛

争であった。人も資源も散々絞り取って国を荒らし回った欧米諸国の政策をバックアップしたのはキリスト教の宣教師であった。アフリカや中南米に対する欧米の侵略をバックアップしたキリスト教の犯罪を問うことなくして、債務だけを帳消しすれば、彼らが救われると言うものでもないだろう。

米軍基地とキリスト教教会に支配される沖縄の姿は、どこかで見た姿であった。それは五〇年前の日本全土で見られた風景である。私の敗戦後の記憶は国を占領されたと言う感覚であり、その屈辱であった。司令官マッカーサーが言っていたように、日本をキリスト教の国にする、というのが彼の占領政策の一環であった。そこで全国津々浦々にまで教会が建てられた。キリスト教政策が成功したがどうかは分からないが、その時代にキリスト教に感化された日本人も多いのではない。私の知り合いでも秋田県で教会に通ううちにキリストの教えに従い、牧師の道を目指した女性がいる。まだ女性には牧師の道が閉ざされていた時代で彼女の願いは叶えられなかったが、そんな彼女に私はキリスト教がそれこそコロンブスのアメリカ進出以来の植民地政策に如何に加担していたのかを問うたことがある。知り合いは何も答えられなかった。というよりそのような歴史は教えられなかったのだろう。

最近、長崎の原爆の悲惨さを訴えた『長崎の鐘』の

著者出版を巡る占領軍とのやりとりがテレビ番組で取り上げられていた。医師の永井博士は著作の中でカトリック信者の多い浦上地区への原爆投下を「神の思召し」と捉えたと言う。その一説を捉えて原爆を投下したアメリカを批判するものではない、と出版を許可したと言う。永井博士の原爆観に今でも長崎では異論があるともされる。しかし、ここでも占領政策と齟齬を生じさせないキリスト教の姿が見られる。

私と教会との出会いも奇妙なものである。名古屋で高校生の時、同じクラスに尼さんになりたいという女性があった。オードリー・ヘップバーンの「尼僧物語」が公開された頃だろう。私たちは公立高校へ通っていて、ともに大学進学希望を持っていた。受験科目に英語が勿論あったが、他の外国語でも受験できた。そして英語よりもドイツ語とかフランス語のほうが簡単だと聞いていた。そこで二人して、プロテスタン系の教会へ行つて、ドイツ語を教えてもらおうと門を叩いた。出てきた牧師は私たちの願いに耳を貸さず、「父と子と聖霊の：」とかなんとか、教えを説くばかりで、説教の合間に私たち二人をちらちら見やる。その目つきの嫌らしさに、私はぞっとして、渋る友の手を無理矢理引っ張り、とにかくその教会から出た。それ以来ドイツ語学習の計画は沙汰止みになった。

当時教会関係者の今で言うセクシユアルハラスメン

ト、性暴力の話は時々話題になった。その牧師が日本の若い女性信者に性暴力を振るったのかどうかは知らないが、とにかくその牧師の目は獲物を狙う獣のそれであったのは確かである。よく痴漢の被害に遭っていた私はとくに敏感に反応したのである。とにかく気持ちが悪かった。這這の体で逃げ出したといつてよい。シスターの服の色が日本にはない、トルコブルーのそれであることを夢見るように語っていた友が後に尼になったのかどうかはわからない。ドイツの教会の一件をどのように受け止めたのであろうか。私たちはその後このことについて話した覚えはない。彼女の夢を碎くような感じがして触れないようにしたのかもしれない。とにかく私には言い難いショックを与えた出来事であった。「父と子と聖霊：」と説く牧師の生々しさは、私にキリスト教の持つある生々しさを教えてくれたのかもしれない。

私の両親は石川県の出身である。母は加賀温泉郷の一つ山代温泉の生まれである。そこは真宗の盛んなところで、朝早くから読経の声が響いている。幼い頃母に連れられていくと、祖父が毎朝お経を唱えて、幼い私たちもお参りさせられた。北陸一帯が真宗の盛んなところで信心深いところである。そしてまたとても封建的なところでもある。男尊女卑が今でも根強い。森首相の地元でもある。彼の時代錯誤の発言もうなずけ

る土地柄でもある。

私の父の里は山代温泉から四キロほど山のほうへ入ったところにある。今にも崩れそうな父の生家に入ると、昭和天皇と先頃死んだその妻の大きな写真が飾ってあって、ぎよつとした思い出がある。父の母親や兄弟は熱烈な天皇主義者であり、ナシヨナリストであつたのだ。父の兄などは極右であつたと聞かされている。父の弟はシベリア帰りで、「口助け」と平然と口にする。父の母親は敗戦で軍は解散して、とぼとぼ帰ってきた父を「天皇陛下のために死ななかつた」と怒り家に入れなかつたほどの「愛国の母」であつた。父の一家の天皇崇拝や愛国主義者ぶりは幼い頃から気色が悪かつた。そうした土地柄が森首相のような思想背景にあるのだ。浄土真宗という宗教を信じながらも熱烈な天皇主義者であり、男尊女卑の土地柄でもある。森首相の学生時代の売春スキャンダルも、温泉町を背景に育つた環境から言えば、当人も支持者も男の甲斐性とも思っているのだろう。

私と宗教との関わりと言うか、育つた環境と言うか、少し記してみた。今でもそうだが、イデオロギーとしての宗教に関心がある。そしてその生々しさに注目している。宗教の名のもとに生々しい現実が覆い隠されているのではないか。その辺りはこれから注目していきたい。世俗勢力としての宗教を見ていきたいと

思っている。

最近話題を呼んでいる本に『秘密のファイル―CIAの対日工作』（春名幹男著、共同通信社、二〇〇〇年）がある。これはアメリカの公文書を手掛かりに、第二次大戦中からのアメリカの対日情報戦略を暴いたものだ。これによれば、日本はアメリカに完全に支配されていることがわかる。日米安保がアメリカの世界戦略の中でのいいように作られて、岸信介とかその弟の時に核も含めた秘密条約が結ばれている。このことがアメリカの公文書で明らかにされているのだ。そこにはアメリカの占領政策の一環としてキリスト教がどのような役割を果たしたかは述べていない。そのことはまだ明らかにっていないのではないか。

また仏教について言えば、沖浦和光と宮田登の対談『ケガレ―差別思想の深層』（解放出版社、一九九九年）も興味深かつた。日本の女性差別の根源をなくすと言われる「ケガレ」の思想のルーツはカースト制度を生んだインドのヒンドゥー教にあるという。この沖浦説は、日本の女性差別思想を考える上で、何か示唆的である。

つらつらと思いつくままに書いてみた。この辺りで終わりにしたい。

現代日本のカトリック教会内での

婚外子差別

屋代 道子

すべての差別の原因は、差別する側が差別によって利益を得るためだ。しかし、ほとんどの場合被差別者の方に原因があるように言われる。婚外子差別の場合もまったく同様だ。婚外子差別は、婚外の性関係による出生の責任を、生まれた子どもとその母に負わせるシステムで、婚外子の父を婚外出生の責任から保護することと、男による女の性支配を目的としている。少し考えれば分かるとおり生まれた子どもには何の責任もない。それでもこの差別はいまもって正統な差別と主張されている。あるいは現実に差別があるにもかかわらず差別が隠蔽される。日本のカトリック教会の聖職者による差別は、後者のケースである。日本のカトリックの司教・司祭・助祭たちに、カトリック教会内でいろいろな差別は有るかと聞けば、多くの人が「無い」と答えるだろう。だが彼らは決して「無い」ことを知っていて答えるわけではない。とりあえず「臭いものにフタ」をするためにそう答えたにすぎない。私は自分自身が婚外子であるため、しばしば神父たちに婚外子差別の不当性を訴えてきた。その結果、神父た

ちの婚外子差別に対する本音を図らずも聞いてしまった。それについて報告したいと思う。

バチカンには、第二バチカン公会議において、婚外子に対する差別をやめた。西欧諸国出身の神父たちはこのことをよく知っている。このことが当時の西欧諸国のカトリック教会に重大なこととして受け止められたからだろう。一方日本のカトリック教会では、このことを知っていたのは大司教を始めごく少数の上位聖職者だけであった。若い神父で婚外子差別が第二バチカン公会議で否定されたことを知っていた人にはまだ会ったことが無い。そして司教たちは、若い神父達が「教会法では婚外子は差別すべき者と定められている」と信じているものが少なくないことをまったく認識していない。例えばO司教区のGM司教は「(婚外子差別は)神父がしてはいけないと指導しているのに、信者がするのでしよう」と言ったが、それは現実に行われていることと全く異なる。カトリック信者達は一般の人と比べて余り差別的ではない。冒頭に書いたように婚外子を差別するのは、それによって利益があるからである。カトリック・プロテスタンにかかわらず、クリスチャンには婚外関係を持たない人が多い。その人達には婚外子を差別する必要が無い。そういう人達は婚外子差別に対しきわめて良識的な判断をする。私は多くの信者たちから「子どもに罪はないから」という

言葉を聞いた。ところが神父には、婚外性交は不当だから、それに対する社会的制裁として婚外子を差別するべきだと考える人が決して少なくない。NM神父はその著者『結婚してからでは遅すぎる』の中で、社会を船・一般の人々を乗客・婚外子を不当に乗り込んできた無賃乗船者に例え、嵐の時には無賃乗船者の所為で船が危険にさらされるのだから、船長は乗客を守るため嵐の来る前に無賃乗船客を海に投げ込むべきだと書いている。彼は婚外子が「不当に乗り込んできた」と考えているが、すべての婚外子にはあきらかにその出生には責任が無い。また婚外子の父は婚外子によって危険に曝される乗客に含まれるが、これには同意できない。彼は明らかに婚外子の出産および出生を悪意を以て行う事ができると考えている。この様な考え方は婚外子の自由意志で行えることではないと知っているが、男の性欲はよくわからない。彼の思想は男の性を無批判に正当化し、女と子どもを男の所有物とするものだ。このような思想は彼個人のものではない。社会全体を支配していると言っても過言でないだろう。カトリックにおいても、第二バチカン公会議以前はそのような思想を元に婚外子を差別してきた。日本の若手の神父達（四〇歳以下）もその影響下にある。カトリックは公的には婚外子差別の目的を婚外の性関係に対する制裁と説明してきたが、それならなぜ婚外の性関係

を持った男にはペナルティーが無く、ただ生まれてきただけの婚外子が差別されねばならないのか。しかも婚外子に対する具体的な差別内容は、婚外子は親に対し、一切関係も権利も持てないということだ。これは婚外性交をした男に、子どもの養育義務を免責したにすぎない。私はカトリックの婚外子差別は「婚外性交をした神父を保護するという目的も併せもっているのではないか」という疑いをもっている。カトリック信者なら知っているとおりの神父の婚外性交は珍しいことではない。もちろん神父の婚外性交は禁止されている。しかし婚外性交は、婚外子が生まれてその子から父が確定されないかぎり、性交の有無は証明できない。もし婚外子からその子の父を確定することを禁止してしまえば、神父自身の自己申告以外の方法で、神父を婚外性交で処罰することは出来ない。これらのことを文学で表現したのが、有名な『緋文字』である。神父が歳を重ねまた教会内での地位が高くなると、婚外子を差別せず教会内の婚外子差別の存在を否定するようになる。

一方プロテスタントにおいては事情は大きく異なる。信者はカトリックと違いがあるように見えない。牧師はカトリックとは逆に婚外子差別に積極的に反対する人が多い。アンデレちゃんと言う母が外国人、父が日本人と思われる国際婚外子の、日本国籍を求める訴訟

を起こしたのは彼の養父の牧師である。以前より牧師や宣教師には養子を育てている人が多い。日本の子どもは養育を目的とした養子縁組は、実に彼らによって支えられてきた。日本では子どもの教育を目的とした養子縁組の養子には、婚外子が多い（新しい家族第35号 養子と里親を考える会）。そして牧師に養育された養子はしばしば牧師になる。このように日本のキリスト教会内での婚外子差別の状況は、キリスト教の教義よりもむしろ聖職者たちの生活に左右される。

女であること・日本人であること

キリスト教という糸で紡ぐ タペストリー

黒木 雅子

私とキリスト教のかかわりはキリスト教系大学での礼拝と聖書との出会いに始まり、そしてその後のローカルおよび中央YWCAの活動だった。ただしどこにいても中心で頑張るタイプの人間ではない、今流に言えばマージナルな関わりだった。しかし天皇制、核問題に対する考えはYWCAの活動を通して違和感なく私の中に入ってきたし、七〇年代の女性運動初期の考え方も同様だった。

今思えば、キリスト教とフェミニズムとの出会いはほぼ同時だったが、ずっとそれらは別個に（どちらかと言うと相互排他的に）私の中にあった。その後、日本から離れることによって日本人であることを考えるきっかけとなった。帰属感や所属感が所与のものでなくつくられることを実感させる出来事が続いた。

それは痛みと同時に解き放たれる感覚が伴うものだった。しかし三〇代までは、思考が経験よりも先行していた。

キリスト教の考え方は二〇代から、宗教性は尊重するが教義に批判的な聖書研究会との出会いや私に影響を及ぼしたキリスト者（このアイデンティティが適切な表現かどうかはわからないが）を通して、知らず知らずのうちに入っていた。ではそのキリスト教の考え方は何かと聞かれても、言葉ではよく説明できない。それまでの私の興味はいわゆる社会問題にあつて、たまたまキリスト教はその背景にあっただけだった。そんな中で私がかかわったキリスト教の団体、集団、個人に対して感じる物足りなさは、どこに行っても女性の経験が反映されていないことだった。YWCAという女性団体の中でさえ、当時はまだ少数の個人としか問題意識が共有できなかった。中央の集会やローカルYWCAでもフラストレーションの連続だ。もちろんYWCAとの出会いなしでは今の私はないとは思って

いる。

そして人生半ばで再渡米し神学校に行くことになったが、これはまったく私の人生の選択肢にはなかったものだ。それまでキリスト教は私にとって批判の対象ではあっても前景に位置することはなかったからだ。私の中にあったキリスト教とフェミニズムの相互排他性に変化し、接合の可能性が見えたと思ったのはこの時である。さらに二回の留学で経験した白人フェミニズム（ひいては日本の近代主義フェミニズム）への違和感に言葉を与え、距離がとれるようになったのはここ数年のことだ。今では、どの出会いも私にとって意味あるものと思えるようになった。

女であること・日本人であること・キリスト教のメインストリームの言説（あるいは教え）への違和感から出発した私の人生というタペストリーを紡ぐ作業は、様々な出会いの中でそれぞれの糸をより直し、染め直しながら、現在も進行中である。

コミュニスト、フェミニスト、クリスチャン

―わたしの「解放」のステップ―

くずめよし

はじめに

今回「フェミニストとしての宗教」というテーマで特集が組まれることになり、わたしも書かせていただくことになりました。そこでこのテーマのもとになつた28号の日比野さんの文章と29号の皆さんの文章を読ませていただきましたが、それらの背後にあるものとわたしの経験とのあいだにギャップをおぼえ、一度は書くことをお断りしました。しかし、編集者の強いお勧めで、やはり書くことにさせていただきました。

わたしがこれらの文章を読ませていただいて受けた印象では、筆者たちは先に組織宗教にかかわり、その組織の中の性差別的なシステムに不快感を覚えるうち、フェミニズムに出会い、その批判力を梃子に、その宗教を批判的に見るようになり、そうした自分たちの考えや感じたことを文章で発表するようになられたようです。ただ、その批判が宗教否定の方に行くか、宗教理解（宗教建設？）の方に行くかの違いで方向が分かれています、というふうに感じました。

これらの方々の歩まれた道とは逆に、わたしは、フェミニストになってからクリスチャンになった者で、フェミニズムで解決できなかった「解放」をクリスチャンになって得た者です。その経験が何か示唆を与えることができればと願い、この文章をかかせていただいています。

「婦人解放」のモデルとしての中国

わたしは日本の一般的な家庭に育ち、特定の組織宗教と関わることもないままに育ちました。ただ、年寄りの多い大家族でしたので、習俗としての宗教行事はわりとていねいに経験しています。また、曾祖父が漢学者だったせいで、儒教道徳が我が家の倫理道徳の基準でした。（まさしく、家父長支配？）そんな精神的な背景のゆえか、わたしはこどもの時から正義感が強く、曲がったことは許せないタイプでした。世の中の不正にいつも怒りまくっていました。時あたかも、一九七〇年代の反体制文化はなやかなりしところで、お隣の中国では、中国共産党による「文化大革命」の嵐が吹き荒れていました。わたしは「世界の不正義・不平等を正すには共産主義革命しかない。」と幼い心で単純に信じ、当時の中国共産党の指導者である毛沢東を崇拜していました。そこで大学入学に際しては中国語を専攻し、大学院では中国近代史を修め、その後、中国の大

学院に留学しました。

中国に行く前、大学に入った頃からわたしはいろいろな男関係で悩み、フェミニズムに出会います。最初は「婦人解放運動」という名前で活動している友達などに出会っても、「そんな恐いことをしている女と思われたら男にもてなくなる。それはおおごとだ。自分はそんな女たちとは違う可愛い女と思われなくては。」という思いでした。また、世の中のシステムに対しては、自分が頑張って切り拓いて行けばなんとかなると思い、「女性差別」を口にするのはずいぶんいい訳だ、ぐらいいに思っていたのです。ところが、現実にあう事実はそんなわたしの思いを粉砕するようなことばかりで、にっちもさっちもいなくなりました。当時は、一九七〇年代も終わり、反体制運動の中の女性差別が糾弾される中で、フェミニズムの第二の波が大きくうねっているころでした。そして、「婦人解放」を達成した一つのモデルとして、中国の女性たちの活動がはなばなしく世界に喧伝されていたころでもあったのです。

ところが、一九八〇年代半ばの中国に留学してみると、そこでわたしを待っていたのは、建前の共産主義革命の理想とその現実とのギャップでした。中国は当時はまだ非常に貧しく、人々は不機嫌で、いつも誰に対しても敵対的でした。（ただ、いったん「ウチ」側に入り、仲間と認めると、今度は暑苦しいくらいの親切

が待っているのですが。)そして、中国政府自体も共産主義革命の失敗を認めて自己批判を始めており、剥き出しの資本主義の導入へと国の方針を大きく転換していました。

しかし、中国女性たちは、かつて「文化大革命」時代に「天の半分を支える」「男にできることは女にもできる」と持ち上げられたとおり、社会のあらゆる分野に進出していました。道路工事や建設現場にも若い女性の姿が普通に見られましたし、店員さんや運転手さん、車掌さんなども男女それぞれ半々のようでした。また、大学の教職員も男女比は三対二か半々ぐらいで、責任のあるポストになるだけ女性が増えるようでした。(当時のわたしのいた大学の総長は女性で、学部長も女性でした。)そのためわたしは、「女性の解放」(当時はそれは「女性の社会進出」と考えていたのですが)においては、やはり「共産主義革命」は成功だったし、それ以外の方法はないと、ますます確信を深めました。

ところが、ここに難問が残ったのです。それは、当の中国女性たち自身がちっとも幸福そうでないことです。彼女たちはアメリカのような物質文明に憧れ、日本のように専業主婦として「家でのんびりこどもの教育に専念できる」ことを理想の暮らしと考えていました。彼女たちは実際、職場と家庭の二重負担に苦しみ、疲れ果てていました。確かに、男たちの家事労働時間は

日本とは比べものにならないほど多いのですが、それは男も女と同じように家事をしなければ家庭が回っていかない社会システムによるものでした。男も女と同じように職場と家庭の二重負担にあえいでいたのです。

社会制度上は男女平等原則が保証され、家事労働も男女で分担し、公式には女性差別はなくなっているかのような中国で、なぜ女たちは疲れ果てて、不機嫌で、苦しんでいるのか。「女性の社会進出」では、問題は解決しないのか。女が男並みになるだけではだめで、女の抱える女独自の問題を、女の視点で見る必要があるのではないか。このような疑問を抱いたわたしは、「これは、いっちゃんしっかり女性学を学ばねば。」と考え、中国研究と女性学研究のしっかりした大学での研究の継続を考えました。ところが、当時(一九八〇年代末)も、そして多分今も、中国にも日本にもそんな大学はなく、やむなくわたしはアメリカの大学院に進学することになったのです。

中国におけるキリスト教との出会い

ところで、この中国時代にわたしは多くのクリスチャンと出会い、生まれてはじめて教会堂なるものにも足を踏み入れます。最初に出会ったクリスチャンは欧米からの留学生でした。友達の多くはカトリックが多かったのですが、彼らは生活態度はでたらめで、金

にうるさく、尊敬できるようなタイプではありませんでした。ただ、遊び友達としては楽しい気のいい仲間でした。しかし、そんな彼らが時折、ふっと「神さま」や「イエスという男」のことを口にすることがあります。そんな時、突如この地上におおいかぶさっている雲が切れて、その隙間から天上の光がさしこむようでした。「彼らはわたしの知らない世界を知っている。」と、わたしには感じられました。

また、当時わたしたちの大学は月に一度「見学」と称して、いろいろな所、国営工場や模範農場などに留学生をつれていってくれました。その「見学」の中にいくつかの教会堂があったのです。「文化大革命」の後で信者たちが再建した立派なカトリックのカテドラルや、歴史的に由緒のある教会堂などです。当時のわたしは全くの観光気分でしたので、プロテスタント教会の講壇に登って十字を切って、手を組んでお祈りのポーズをして記念撮影をしたりしていました。

そんなわたしでしたが、ある時、やはり学校からの見学で、上海のカトリックの司教さま(?)にお話をうかがう機会がありました。その方が、わたしたちの失礼な質問にも本当に真摯に、誠実に、政治的にもぎりぎりのところまでお答くださったことが、本当に心に深い印象を刻みつけられました。当時の中国においてはまだまだ政治的発言は慎重でなくてはならず、

人々は決して本音を語らず、建前の公式見解を繰り返すしかなかった中で、何の義理もない外国から来た留学生たちに、精一杯誠実に答えようとした姿に、信仰者の「真実性」を見出した気がしたのです。

さて、そんなこんなで中国留学からアメリカ留学の間の短い日本滞在期間中にわたしは、ある日ふっと「アメリカに行ったら、キリスト教会なるものに行ってみよう。」と思いました。それは、まるでどこからか風が吹いてきたような感じで、一瞬の後には忘れていくほどのものでした。ところが、その夜同居の祖母が「上海に行く前にもみてもらった占い師さんに、アメリカに行く前にもみてもらっておけ。」というので、みてもらいに行きました。すると、その方が、こちらが何も言わないのに、「あなたはアメリカに行ったらキリスト教やりますよ。それも、かなりやりますよ。」とおっしゃるのです。そして、わたしの顔をじつと見て「うーん、仏さまじゃないねえ。神さまの方だねえ。」とも言われました。それまでのわたしはキリスト教とは全く縁がなく、神社ともそれほど親しいわけではなかったのですが、お寺とは行き来もあり、六〇歳になったら得度して尼になる、などと言っていたので、「仏さまじゃないねえ。」と言われると少しさびしい気もしましたが、「神さまの方だねえ。」という言葉は、単純に、何か真実なるものとの関わりにお墨付きをもらったようで、

うれしく思いました。

アメリカでのフェミニズム研究

さて、このような思いでアメリカに留学し、本格的に「女性学」を勉強し始めました。まず、手始めに一九七〇年代の第二波フェミニズムの基本的文献を網羅的に読まされ、次に二〇世紀初頭の第一波フェミニズムの文献を読まされました。第二波フェミニズムの文献には当然既存のキリスト教会・教界の中の家父長支配体制に対する激しい批判や非難がありました。そして歴史の中で教会が、聖書を根拠に行なってきた、女性や社会的弱者に対しての、ある時はあからさまな、またある時は隠微な、支配や抑圧の構造が、完膚なきまでに暴かれ、西欧における「女嫌い文化」を構成する上で、キリスト教会の果たした役割の重要性と決定的影響が実証的に証明されていました。それに対して、第一波フェミニズムの文献の背後には、「神への服従は、世の不正義に対して闘うことを意味する。」という考えがあり、男権主義で汚染されたキリスト教を女権主義できれいに洗って清めよう、そしてよりイエス・キリストの福音に近いものにしようという姿勢が見うけられました。いずれにしても二つの波の底には、決して妥協を許さない毅然とした人権意識が確固として横たわっていたのです。しかし、これこそ「神の前の

個々人の絶対平等」を聖書から読み取った近代意識に他ならないのではないかとわたしには思えました。

また、当時（一九八〇年代末）には、フェミニスト神学の初期の金字塔のような文献もかなり出揃い、女性たちが教会の中の家父長支配とどのように戦ったか、あるいは逆にそれを利用し、自分たちをエンパワーしたかという過程も分析されるようになりました。私たちはいつも、抑圧を逆手に取り、自分たちに有利に使う知恵があったのです。時にはそれが他者を抑圧する方向に働く力ともなったのですが。当時はまた、そうした動きと併行して、女性と霊性（スピリチュアリティ）の関わりについても新しい見方が始まっていました。それは一言で言えば、スピリチュアリティ自体の持つ、女性をエンパワーする側面をきちんと検証しようというものでした。これらの新しい見方や動きは、わたしに単なる「犯人追求型」の研究ではなく、新しい地平を拓くフェミニズムの底力を示してくれたのです。

アメリカでのクリスチャン生活

このように、わたしは聖書を自分の信仰の書物として読む以前に、またクリスチャンとして本格的に教会生活を始める以前に、先にフェミニズムの文献を読んでいたのです。他の多くのみなさまの経験とは逆で、信

仰・教会↓フェミニスト神学ではなく、フェミニスト神学↓教会・信仰という順番になります。

さて、アメリカに渡った当初に紹介されて行ったのは、英語礼拝しかない教会でした。それでなくてもまだ英語がよく分からないのに、教会ではそれまで見たことも聞いたこともないような単語が飛び交う状況に、「こりゃ、日本語でまずキリスト教を学ばなくては。」という思いになり、日本語礼拝をしている教会を探しましたが、その場所になかなかとりつけず、何度も失敗するという経験をしました。そのため、今わたしは、わたしと知り合う方々のどなたでもが、もし教会へ行きたくなったら、いつでも建物までは案内できるように、「わたしはクリスチャンです。いつでも神さまについて、教会の場所について聞いて下さい。」という思いでいます。それは、わたしのような苦勞を、他の方々にはさせたくないと思うからです。

そうしてやっとたどりついたところが、学校の寮から電車で一時間ぐらいの日本人教会でした。そこは一応プロテスタントの長老派に属していましたが、なにせ半径二〇〇キロメートルぐらいの地域の中に一つしかない日本人教会ですから、日本人のクリスチャンは教派を問わず、カトリックからセブンスデーまでみな集まってきました。牧師もカリスマ系やらメソジストやらホーリネスやらのバックグラウンドを持っており、

今思うと「ユニオンチャーチ」だったなあ、と思います。しかし、当時は何も知らないのです、キリスト教とはそんなもんだ、みんな「神」理解、「聖書」理解は一人一人違うもんだと思っていました。そこに、せっせと毎日曜日通い始めたのですが、わたしは「キリスト教なんて、西洋人の植民地主義のお先棒をかついだ宗教、十字軍のこともあるし、世界的に見たら、悪い事ばかりしてきた宗教」と言っては、家庭集会でけんかを売ってばかりいました。しかし、当時の教会員は、今思えば神のあわれみだと思うのですが、そんなわたしのけんかを買うでもなく、やさしくきよくつつんでくれ、本当にいごちよく受け入れてくださいました。わたしは教会に行く度に、天国に行くような思いで、本当に気持ちよかったです。

そのような教会生活の中で、洗礼を受け、クリスチャンとしての歩みを始めるのですが、一年目はまだその天国の味が続いていました。ところが、二年目になると、教会は分裂問題が起こって、大騒動になりました。それまで、尊敬し、信頼していた牧師や長老たちが互いにいがみ合い、聞くに耐えない、聞いたら耳が汚れるような誹謗中傷を繰り返しました。しかし、わたしは平気でした。わたしはその頃には全てのものとをわたしと神との縦の関係でまず捉える習慣になつていたので、このようなことも「ああ、一年目は

まだわたしの信仰が未熟だから、神さまがあわれんで、天国の前取りのような教会生活をさせてくださったんだなあ。教会員一人一人の醜い部分はベールで覆い隠して見せないようにし、清らかな部分、キリストの香りを放つ部分だけを見せてくださったっていったんだなあ。二年目になると、もう大分信仰も成長したから、神さまもう大丈夫と思って、わたしに人間の生身の姿を見せて下さったんだなあ。人間は所詮愚かで弱い存在で、教会と言えども、決して天国ではない、ということとを、教えてくださるために、このようなことを見せてくださいるんだなあ。」と思っていました。そして、それまで教会でいろいろ指導や教えを受けた方々に対する尊敬と信頼は、少しもなくならず、ますます愛と敬いの心が湧いてきて、今日にいたっています。

ですから、聖書を読むにしても、まずフェミニスト神学の知識が先にありますから、「ほほう、これが例の男権主義者のパウロさんの書いた文書ですか。どれどれ、ああ、出て来た、出た来た、批判されてる通りの事が書いてある。」とむしろ面白がって読んでいました。そして、その後で、例の「縦の関係」からその箇所を読み、「なぜ、今日この個所が、わたしへの本日の聖書日課として与えられたのか。」と考えるようにしていました。いつもその理由は納得のいくことばかりでした。実際毎日毎日、その内容に関わりなく、その

日の聖書日課の中で示されたことを一日の指針として生きれば、全てはうまく行く、全てハッピーという状態で、これなら聖書のことばに人間の知恵で文句つけたり、怒ったりしても仕方がない、という境地になりました。ちなみに、「女は男に従いなさい。」というみ言葉が与えられた日は、「くっそう」と思いながらも恋人の男のために心をこめて祈り、今までのわたしのわがままを神さまに告白して、赦しを請いました。その祈りが終わって、階下を下りて郵便受けを見ると、モロッコに行ったまま音信不通だったさんの男から、本心に真心のこもったラブレターとプレゼントが国際便で届いていました。この間約五分。

日本におけるクリスチャン生活

こうして、一九九〇年代の初めに日本に帰国して、日本でクリスチャン生活を始めましたが、昼間は大学のゼミに通いつつ研究を続け、夜は無教会の講座や研修所通いと福音派の超教派の神学校に一日交替で通いました。また、日曜日は朝から三、四つの教会をはしごしてミサや礼拝に出させていただきました。今までに三百から五百ぐらいの教会におじゃまさせていたのだと思います。また、三年前からは「牧師夫人」という名の変な立場になったので、教会組織の中枢に身を置くと同時に、他の教会の内部事情にも通じるネッ

トワークを得ました。

これらの経験から得られた印象を一言で言う、日本のキリスト教会の問題は、西欧のキリスト教会の問題とは違う、ということです。ジェンダーの問題に関して言えば、日本のプロテスタント・キリスト教会が抱えているのは、近代社会における「家父長支配」の問題ではなくて、中世的な「家母長（マトロン）支配」の問題ではないかと思うのです。日本のプロテスタント・キリスト教会におけるイエス・キリストのイメージからして、わたしから見ると、ほとんど「観音さま」。まるで、大地母神のように「何をしてもゆるしてくれ」存在であるかのようなのです。「おいおい、父なる神はさばきの神だぞ。そんなに、ええかげんなことではないのかっ！」と、わたしは、フェミニスト神学では糾弾の対象であった男性原理を持ち込みたいぐらいです。教会内の実際の権力者も、決して牧師や男性長老ではなくて、牧師夫人や婦人会長であり、男性たちは、おばさま方のご機嫌を損ねないように、小さくなっています。日本においては、男性および男性性こそ「教会のマイノリティ」として教会内で疎外されているのではないかと感じています。例えば、教会での祈りの課題には、中絶や不妊の苦しみ、子育てや学校でのいじめの悩み、夫婦間の葛藤、嫁姑問題、病や死とその介護の問題など、女性の生活の生々しい側面が丸こ

と関わってきますが、男性の性的不能、職場でのいじめやリストラ、妻や子どもへの不満、老いや孤独や死に対する不安などが、共通の祈りの課題になりにくい状況があるのではないのでしょうか。

ただ、いくら「家母長支配」と言っても、カトリック教会の内情はよく存じませんが、プロテスタントの中では、無教会はたしかに男教会だと思います。（ただし、わたし自身は無教会の方々からは励ましを受けこそすれ、抑圧は感じたことはありません。それは、わたしが無教会では「名誉男性」として取り扱われているからかもしれません。）日本においてフェミニスト神学の立場から声を上げる方々に無教会関係およびカトリックの方が多いのも、これらの教会が他の教会よりも近代家父長制による女性抑圧がきついからなのではないでしょうか。アメリカでフェミニスト神学が生まれたのも、プロテスタント教会よりもより女性抑圧的とされたカトリック教会内部からでしたから。

翻って、わたし自身の日々の教会生活は、いたってお気楽。「牧師夫人」といっても夫とは別姓別居で、牧師館ではなく、車で二時間以上離れた町に一人で住み、教会にいらるのは土日のみです。教会に帰れば、牧師や他のおばさま方がおいしいご馳走を持って待っていてくれます。ただし、「家母長」あるいは「霊的指導者？」としての期待があるのか、いくら「よしさんって呼ん

で。」と言つても、「先生、先生。」と呼ぶ人がいます。このようなヒエラルキーを見せつけられると、やっぱり教会は近代社会じゃないなあと思つたりしますが、「いや、待てよ。もしかしたら男性に対する代理戦士の役割期待なのかもしれない。」と思つたりもします。おじさま方からは「名誉男性」扱いなのか、上から押し付けられる経験は皆無で、反対に下から「よしを何とか励まして、いろいろ元気に活躍してもらおう。」と焚きつけられています。わたしは、豚もおだてりや木に上るとばかり、木の上ではだかで踊っています。

そんなわたしの教会生活の中のジェンダー関係の悩みと言えば、「男性をいかにエンパワーするか。」ということ。日本の教会も、そして社会も、戦後五〇年のつつけの原因は、決して近代「家父長支配」ではなく、「父の不在」もしくは「父なる神の不在」ではないかと思うからです。翻つてみれば、第二次世界大戦が終わったときの日本軍の、そして日本国家の最高責任者であった天皇は、戦争責任を取らないまま死去しました。「父」としての責任を取らずに、「母」として国民と一緒に「みんな、つらかったね。」と泣いただけなのです。それは、国民一人一人にとつても免責を意味しました。確かに一部の人が「戦争犯罪者」として罰を受けましたが、それは彼ら一人一人が自己責任を取ったからではなく、単に運が悪くて、よその人（ア

メリカ）に叱られたただけだ、とみなされたのです。こうして、良い事は「誰かのお手柄」、悪い事は「その仲間みんなの不幸」という、日本的な集団主義が温存されて五十年。誰も、一人でさばきの神の前に立ち、自分個人の責任を問う、という作業をしないままに来てしまいました。その結果が集団無責任体制の日本社会であり、日本の教会ではないのか。「母にゆるされる」ことには慣れていても、「父に叱られる」ことから逃げつづけてきたわたしたちの姿が、今醜い結果をよび、社会の底が抜けるような状態を招いているのではないか。そしてまた、「父なる神」というモデルがないから、教会の男性たちは、いや教会に限らず日本の男性たちは、どのように生きて良いのか分からずにいるのではないのか。二十一世紀には「男性問題」こそ、ジェンダー問題の中心になり、「男の生き方」こそが男女共に考えなければならぬ問題になるのではないでしょう。他者抑圧的ではない、健全な男性性の発露や発展こそ、今日の日本の教会が、いや世界の宗教が抱えるテーマなのではないかと、考えている今日この頃のわたしです。

(了)

宗教と戦時性暴力被害者の癒し

宋^{ソン} 連玉^{ヨソウ}

青年期まで韓国の農村で儒教をたたき込まれて成長した従兄は、最近になってソウルでカトリック信者になった。地方都市に住む従姉も還暦を過ぎた頃から教会に通いだした。彼らはたまに会う私に向かって、この時とばかりに、聖堂や教会に通うように諭す。

いまやソウルの人口は韓国全人口の四分の一を占めるほどに、首都へ一極集中しており、そのうち釜山もソウル市釜山区になるだろうという悪い冗談も飛び交う。人々は急速な都市化の過程で農村共同体的な紐帯をもとめ教会に、聖堂に集まりだした。これが一九七〇年代以降にキリスト教信者の増えた社会的要因の一つである。

従兄のように儒教を生活規範として遵守しながらキリスト教を信仰する人も多い。日本よりもはるかに儒教に取り込まれた韓国でかくも非儒教的宗教——とくにキリスト教——を求める人々が多いのは、植民地支配に続く南北分断、朝鮮戦争、軍事独裁政権による政治的暴力、貧困などにさらされ、一見民主化が進み、経済的に豊になったかのような今日でもなお癒されぬトラウマが人々を捉えているからなのだ。

もつとも深刻なトラウマに苦しむ人に日本軍「慰安婦」にされた女性たちがいる。彼女たちが断続的に見せる不安定な精神状態は『ナムム（分かち合い）の家のハルモニたち』（人文書院）に活写されている。戦争や貧困、「虎より怖い苛政」が人々にもたらす悲劇は容易に癒されぬ心の傷を負わせ、時には心を壊死させるからである。

どうすれば彼女たちに心の平安がもたらされるだろうか。真に癒されるために何が為されるべきか。

多感な少女期、私はミツシヨンスクールで中学と高校の六年間を学んだ。ミツシヨンスクールに通うことで、在日朝鮮人の集住地区の共同体から切り離され、階層の違う世界に一人で放り込まれてしまった。そのことによるカルチャーショックもさることながら、私を日常的に苦しめたのは、隠然と語られる民族差別の言葉であった。心ない言葉に胸が押しつぶされ、終いには息ができなくなってしまった。これは私一人のものではなく、同年代のほとんどの在日朝鮮人が不思議なほど等しく語る体験談である。

暗いトンネルの中で、出口を求めて聖書をひもといたこともあった。しかし私の理解が幼かったから、聖書はトンネルの出口に私を連れだしてはくれなかった。従兄、従姉の説得に簡単に応じることのできないのは、従兄、従姉の知らない、かつての私の体験が重いから

だ。

一九八〇年後半から韓国社会は民主化に向かって大きく前進し「虎より怖い苛政」は是正された。日本も九三年に独立政権首班の細川首相が「あの戦争は侵略戦争だった」と明言し、私たちを幾分期待させたが、「慰安婦」を敵視する昨今のネオナシヨナリズムの動きは幼い頃の私のトラウマを蘇えさせる。

トラウマを与えた社会や歴史を変えないまま、宗教がトラウマを抱える人々への救済や癒しを与える事は可能だろうか。私の経験からすると否である。宗教が社会を変える力に繋がらない限り、現世利益を求める類の宗教はともかく、根源的にトラウマを癒すことは出来ないだろうと思う。

一月八日・一二日に東京で開催される「女性国際戦犯法廷」に私が期待するのは、女性被害者の視点から歴史を、戦争を問い直そうとするからであり、そうすることが被害者のトラウマを癒す最優先の方法だと見なすからである。多くの方々に参加して下さることを呼び掛けたい。

再び「仏教と『慰安婦』問題」

——鶴岡瑛さんの応答に答えて

池田恵理子

29号の鶴岡瑛さんの文章を読ませていただきました。仏教には門外漢の粗雑な印象論を読んでもくださり、あのように長文の批判を書いてくださったことに恐縮しています。私は素朴な疑問点について専門家の意見を聞きたかったので、鶴岡さんの論文の表題を見て喜びました。しかし読んでみると私の論旨をヘキリスト教対仏教の対立などと、本人が考えてもいないまとめ方をされて仏教擁護論を展開されているため、正直言ってがっかりしました。しかし「慰安婦」問題や「女性国際戦犯法廷」についての理解不足や間違いも目に付きます。そこで返信を書くことにしました。

「仏教国の人々にみられる現状肯定と現実には逆らわない風潮は、仏教と何らかの関係があるのだろうか」という私の疑問に対して鶴岡さんは、スリランカの〈輪廻思想〉について教えて下さった上で、「(日本の)仏教界を擁護する気持は全くない」としながら、「仏教に社会性が足りない」のは、「本当の〈仏教〉が十分に影響を与えられなかった」からだと言われています。

だとしたら「本当の仏教」はどうしていたのでしょうか？「本当ではない仏教」が現実には力を持っているとき、仏教徒は現実を変えるべくどのように生きているのでしょうか。仏教徒には「常に権力者の愛顧を求めがちだった」という傾向があるとしたら、それはどこに原因があるのでしょうか。どれも「仏教界」のせいですか。私はこれが知りたいところでした。

また鶴岡さんは、「フェミローグ系の方々」は「坊主憎けりや袈裟までも」式に、「仏教界」に問題が山積している。それは「仏教がよくない教えだからだ」と両者を一つにして断罪をする」と批判されます。私はその「系統」の者ではありませんが、旧フェミローグの人々の著作から感じるのは「憎しみ」ではなく、仏教そのものや、強固に立ちまわっている仏教界とその影響を受けた日本人の精神構造を批判的に読み解いて、この現状を変えていこうという誠実さです。

私がこのような問題に関心を持つのも、仏教を否定したいからではなく、仏教徒が圧倒的多数を占めて大きな影響力を持つ日本に生きているからです。そしてこの日本を少しでも変革したいと思うからです。

日本人の性意識と仏教について

買春を容認する日本の性風土と仏教の関わりについて、鶴岡さんは「（売笑制度の黙認は）仏教だけでは

なくキリスト教を始め世界の宗教に共通すること」と、あつさり述べるにとどまっています。フェミニストの仏教研究者たちによる、「仏教の差別的な女性観が日本人の買春文化の土壌となってきた」という指摘は、「慰安婦」問題を考えるとき大いに参考になりましたが、これは的外れですか？ ここについてもご意見を聞けず、残念です。

私たちは「女性国際戦犯法廷」の準備で、「慰安婦」制度を可能にした日本人男性の性意識と性行動について、元兵士への聞き取り調査や資料収集をしてきました。買春は古くから世界中のあらゆる社会に存在してきましたし、戦争と軍隊があるところには戦時買春や戦場強姦が発生しています。しかし日本軍のように組織的かつ広範囲に、しかも長期にわたって性奴隷制を維持し続けた軍隊は見あたりません。またこのような制度を半世紀経った今も、「必要悪だった」と肯定する論調が広く受け入れられている社会は、かなり特異ではないかと思っています。

私は三年ほど前に仲間達と、日本人男性の買春意識と行動を調べるために一万人アンケート調査を行いました。このような調査はどの国でもほとんどなされていないため比較検討ができないのですが、回答してくれた男性二五〇二人の約半数（四六・二％）が「これまでに一度は買春をしたことがある」と答えています。

そして買春する意識や行動パターンには世代間でほとんど差がないこと、買春が男文化として日常生活に定着していることもわかりました。「男性の約半分が買春経験者」という結果を「少なすぎる」と考える人もいました。私はかなりの割合だと思います。

このような日本人男性の意識や行動がどのように作られてきたかという背景を考えると、社会環境や家庭、教育、マスメディアなど様々な分野からの検証がなければなりません。仏教や神道、儒教などの伝統的な宗教が与えた影響について考察する必要も感じています。そのため仏教など宗教を専門とする方々の意見を聞きたかったのです。

性暴力被害者が名乗り出ること

鶴岡さんは「なぜ日本人慰安婦が名乗り出ないのか」という問いかけに驚いたと書いています。しかしよく読んでいただければわかるように、私は「何故タイやビルマ、日本など仏教国の被害者から名乗りでがないのだろうか」という疑問を述べただけです。宗教の影響を受けたそれぞれの社会の価値観や性意識、個人と社会との関わりの持ち方などと、被害者の名乗り出という行動との関係を考えたいと思ったからです。

日本だけでなくどのような国でも、性暴力被害者として「名乗り出る」ことは、いくつもの障害を乗り越

えた少数のサバイバーだけにできることであり、「名乗り出ることができた」という可能動詞が相応しい行為であることは、「周知の事実」ではないでしょうか。私も日本人「慰安婦」は、これまで名乗り出られない状況にあったと考えています。鶴岡さんの文章を読みながら考えたことを、少し書いてみます。

日本人「慰安婦」が名乗り出られない理由には様々な背景があります。鶴岡さんの言うように、日本人「慰安婦」には公娼制度下に遊廓で働かされていた女性たちが多く含まれていました。しかし私は「売芸をなりわいとしていたプロ」には、性暴力被害を訴えられるはずがないではないか、とする鶴岡さんの見解には賛同できません。これでは半世紀近くを経て各国の「慰安婦」が日本政府を告発するに至る背景を十分に理解できないだけでなく、このような見方こそが被害者たちに長い間沈黙を強いてきたという事実から目をそらすことになると思うからです。不特定多数の男性と性交渉を持った女性とは人間扱いしないという「売春婦」差別や、「例え強姦によっても処女でなくなった女は『傷物』」と考えるような、女性を男性の財産であり私有物とした家父長制イデオロギーこそが、性暴力被害者の声を封じて、長年苦しめてきたのです。

「慰安婦」にされた女性たちの経歴は様々です。遊廓

などで働かされていた女性たちが「慰安婦」にされたのは、日本だけではありません。植民地にされていた朝鮮半島や台湾などからも、駆り出されています。中国やインドネシアなどの占領地でも、売春や接客業をしていた女性たちが日本軍の「慰安婦」としてルートの対象になりました。

日本には名乗り出た「慰安婦」被害者の中に、「シロウトの生娘」とは思えない経歴の持ち主を洗い出して、鬼の首でも取ったように喧伝する輩がいます。しかしどのような経歴を持った女性でも性暴力と闘うのは当然のことであり、暴力を受けたら加害者を訴える権利を持っています。この当然のことを可能にするために、どんなに長い時間がかかったことでしょうか。これまで性暴力の被害者は、「すぎがあつたのではないか」「ふしだらだったからだ」などと言われて、被害者の方の責任が問われてきました。今ではしだいに「性犯罪では加害者こそが責任を問われるべき」という考え方が強くなってきましたが、これは極めて最近のことです。「女性への暴力は重大な人権侵害」とするフェミニズムの主張が力を持つようになってきて、やっと受け入れられるようになりました。同時に公娼制度は国家に管理された性奴隷制だったという歴史認識も、近年になって確立されました。またアジア各国では少しずつ事情が異なりますが、冷戦構造の崩壊と経済復興、

民主化運動などによって、国家に対して個人の権利を主張できる社会が実現していく中で、「慰安婦」の名乗り出が可能になってきたのです。

日本で「慰安婦」問題をなきものにしようとしている勢力は、「強制連行はなかった。女性たちは金儲けのために徴集に応じた売春婦だ」としています。これは「売春婦」ならどのように扱おうと犯罪にはなるまい、と考えていたであろう慰安所を作り運営していた日本軍の上層部にも、「慰安婦」への懐かしい思い出は語るけれど彼女たちへの行為が性犯罪にあたるとは想像することもできない日本軍元兵士たちにも共通した見方です。

「慰安婦」にされた女性が「シロウト」だったのか「プロ」だったのかという議論は、このように「慰安婦」問題をなきものにしていこうとする人々の好む問題の立て方であり、それがなりたつかのような論調の中に「売春婦」差別が根深く残っています。日本人の「売春婦」差別意識は、長い歴史を持つ日本の買売春容認文化と深く関わっていると思います。

性暴力事件において、被害当事者側の事情をウンヌンして女性たちに沈黙を強いていた時代から、被害者を取り巻く社会の側に問題があると考えた時代へと、大きく転換してきたのが現代です。このような転換期には政治・社会や国際情勢だけでなく、人々の意識を

形成してきた伝統的な価値観や性意識、差別意識などが問われます。ここでも宗教の影響は無視できません。宗教はこれまで、犯罪の被害者を救済する役割を果たしてきたと思いますが、宗教関係者には被害者を生み出す土壌そのものを問い、被害者を取りまく社会的な問題への関わりと貢献をして欲しい、と願っています。

責任者処罰について

鶴岡さんは天皇に戦争責任があるのに、連合国の政治的判断で免責になったと論じ、「昭和天皇の戦争責任を問えなかったこの社会がいまとなって、大局の中では小さな歯車でしかなかった責任者の生き残りを法廷に引き出そうとするのは、あまりにも公正を欠くと感じます」と書いています。鶴岡さんが「女性国際戦犯法廷」は天皇の戦争責任を問わない、と決めつけているのはどうしてでしょう？そんなことできつこないと思っているからですか？「女性国際戦犯法廷」について、どこからどのような情報を得られて、このように考えているのでしょうか。また責任者の生き残りしか「法廷」で問題にできない、と言うのはどうしてですか？ 日本軍のトップにいた責任者たちのほとんどは、すでに亡くなっています。しかし生死の別に関係なく、「慰安婦」制度に関する彼らの責任を問い、それがどのような戦争犯罪にあたるのかを明らかにすることは可

能だ、と私たちは考えて「法廷」を開くのです。

鶴岡さんが「法廷」についてお知りになりたければ、すぐにも資料を送ります。「私は『慰安婦』問題について不勉強で、支援にもかかわっていないので、発言する資格はないのですが」と言われますが、間違えた情報や思いこみで、この問題に取り組んできた者たちの活動や理念を否定されては大変困りますし、悲しくて言葉ありません。

三年前に立ち上げたVNN.NETは現在、日本での会員がおよそ五〇〇人。私たち日本のメンバーの大半はこれまで各国の「慰安婦」NGOで被害女性たちの支援や民事裁判支援をしてきた女性たちで、そこに法律や歴史の専門家たちが加わっています。アジア七カ国で被害者を支えてきたNGO、法律家、研究者たちと一緒にあって、どうしたら「慰安婦」制度を作り運営してきた日本軍上層部及び日本政府の加害責任を問えるかを、調査し議論してきました。当然ながら大元帥として戦争の最高責任者だった天皇の戦争責任は当初からの大きな課題でしたし、今もなお調査と法的問題の検討が続けられています。天皇の戦争責任を明らかにすることは、すべての被害国の構成メンバーの強い願いであり、私たち日本のメンバーも全く同様に思っているからです。

私は映画『ナヌムの家』にも登場する韓国の被害者、姜徳景（カン・ドッキョン）さんに出会って教えられ、励まされてきたことから、姜さんが一九九七年二月に肺ガンで亡くなった時に、仲間たちと『私たちは忘れない―追悼・姜徳景ハルモニ』というビデオ作品を作りました。この姜徳景さんから託された遺言のひとつが、「責任者処罰」でした。

姜さんが亡くなる寸前まで、公式謝罪も国家補償もせず法的責任を認めようとしない日本政府が、金で方をつけようとばかりに出してきた「国民基金」への批判と、「責任者処罰」を訴えていました。姜さんはナヌムの家に移り住んでから絵画を描き始め、素晴らしい作品を多数残していますが、「死ぬまでには描きたい。描いてから死ぬんだ」と言って描き残したのが、『責任者を処罰せよ』というタイトルの壮絶な絵です。真紅の背景の中、大木に鉄条網でくくりつけられた軍服の男がいます。目隠しをされていますが、その顔は昭和天皇に酷似しています。男へ三方向から向けられた銃口。まさにこれから処刑が行われようとしている図です。

初めてこの絵のレプリカをナヌムの家で見た時、私は鳥肌が立ちました。姜さんの「責任者は罰されるべきだ」という強烈な思いと同時に、木の回りに白い鳥たちが飛んでいることと、木の枝にある鳥の巣に卵が

七つ描かれていることに強く打たれたのです。白い鳥は姜さんの絵によく出てきますが、これは「自由」を運んでくれるシンボルだと言っていました。私は巢の中の卵に、次世代や未来への希望が託されていると感じました。このような厳しい処刑の絵を描きながら、そこにも「希望」や「自由」を描きこんでいく姜さんの切実な気持を思うと、胸がいっぱいになります。

姜さんが亡くなった後も、姜さんの言い残したことを私なりに果たしていきたいと思っていたので、「女性国際戦犯法廷」の準備には始めから関わってきました。様々な国の被害者を支援してきた VAWW-NET Japan のメンバーには、各国の被害者への共感と、日本人として戦後責任を果たしていこうという思いがあります。被害女性たちは真相究明、公式謝罪、国家補償、責任者処罰などを求めて日本政府に損害賠償請求裁判を起こしています。政府は道義的責任は認めたものの、法的責任を一切認めていないからです。

しかし天皇の戦争責任を問うことは、日本社会でタブー中のタブーである問題に真正面から立ち向かうことになるので、大変な緊張を強いられます。直接・間接の様々な妨害や嫌がらせも予想されます。これ乗り越えて「法廷」を実現するには多くの人々の支援なくしては不可能です。このような主旨に関心をもち賛同してくださるなら、是非「法廷」に参加していただ

きたいと思います。

加害責任を問うこと

しかし私は、天皇を訴追するだけでは「慰安婦」問題の加害責任を問うことになると思っていません。慰安所設置を命じた軍の司令官たち上層部にも、それを作り運営した部隊の責任者にも、慰安所を利用した兵士たち一人一人にも、それぞれの加害責任があると考えています。戦後にこの問題に関わる事実を隠匿した日本軍や政府関係者、被害者の声を無視し続けてきた政治家や行政官の責任も重大です。

戦時買春も戦場強姦も、上官の命令で行う行為ではありません。前者は兵士の自由意思で選択できたことでしたし（中には「いじめ」のように、無理矢理慰安所に放り込まれた兵士もいましたが、極めてわずかで）、後者は大半が黙認されていたとはいえ、建前としては軍法会議にかけられる犯罪行為でした。しかし何故、日本軍元兵士には性暴力に対する罪責感が薄いのでしょうか。これに関連して、鶴岡さんは次のように書いています。

「一般国民もなにしろ天皇が免責されているのですから、自分たちのしてきたことを真剣に反省するわけがありません。元兵士に加害のトラウマが少ないというのは、この辺に原因がありそうです。天皇にさえ戦

争責任がないとすれば、一兵士の自分たちに責任なんかありっこないと、自分で自分を免責する心理操作が働いたと考えられます」

私も全く同じように考えています。元兵士が自らの加害責任に向き合うためにも、天皇をはじめとする日本軍の責任者の加害責任が問われなければなりません。それに加えて兵士たち自身が自分の過去に向き合わなければならぬと思っています。

この大きな問題をここで論じるには時間も紙面もありません。VAVV.NET Japanでは今年七月に、女性国際戦犯法廷の記録シリーズ・第二巻、『加害の精神構造と戦後責任』（緑風出版）を出版しました。これを是非読んでみて下さい。私の拙文も含まれていますが、日本軍がなぜ残虐な性犯罪をひきおこしたかについて、軍隊の構造や男性神話からみた兵士の精神構造、兵士の加害意識、性意識などを、各執筆者が具体的に多面的に論じています。天皇制と戦争責任についても、日本仏教の加害責任を取り上げた源淳子さんをはじめとして、ここで話題となっている問題に深く関係する論文がいくつも入っています。

親鸞の「罪の意識」については、私が言葉足らずだったと思います。親鸞自身は罪の自覚も深く、苦しんでいる民衆に寄り添って生きた仏教徒だったと思います

が、私はつい、その思想はどのような影響を与え、人々をどう動かしたのか、ということばかりを考えてしまいます。「教えの本質を見ずに、社会的な影響ばかりに目を奪われている」と怒られそうですが、不勉強のいたすところです。さらに学んでいきたいと思っています。

最後に鶴岡さんは、『責任者処罰』より、過去の歴史に学び二度と同じ事態を引き起こさぬよう、私たちの社会を変えなければならぬ」と書いています。私は過去の歴史に学び、私たちの社会を変えるためにも、『責任者処罰』が必要であると考えています。性暴力の加害者への処罰は、この現状を変えるための唯一の方法ではありませんが、極めて重要なひとつの方法です。天皇の戦争責任まで考えている人が、なぜ「責任者処罰」を避けようとするのか、私はその理由と背景をもっと知りたくなりました。

一九九八年、国連の人権小委員会で採択されたマクドゥーガル報告は、「慰安婦」問題解決のために加害者の刑事責任を問うべきだという勧告を出しました。「責任者処罰」が行われない社会というのはどういうことでしょうか。強姦をしても何の処罰も受けないとしたら、その再発を防止できるでしょうか。暴力の連鎖は断ち切られるでしょうか。

強姦は戦争には付き物だという認識はいまだに広く

受け入れられています。現代の紛争でも性暴力は減るどころか、ますます凶暴化しています。戦闘行為の一环として強姦が多発しています。だから旧ユーゴやルワンダでは、強姦を含めた戦争犯罪を裁く国際刑事裁判が開かれ、国際刑事裁判所の常設が決まったのです。しかしここでは過去の戦争犯罪を取り上げることではできません。だから二〇〇〇年の一二月に「女性国際戦犯法廷」を成功させよう、という機運が様々な国の女性たちの間で、高まってきたのです。

このような「法廷」に関心を持たれたら、どうぞ声をかけて下さい。日程は一二月八日から一二日まで、傍聴申し込みは九月一日から始まります。一人でも多くの方々の支援と傍聴を願っています。

お問い合わせは TEL&FAX 03-53337-4088

E-mail vaww-net-japan@jca.apc.org

「もてない女」は如何に

キリスト者であり続けたか (二)

― 結婚篇 ―

金子 (真鍋) 祐子

本会会員の中で、私という人間はおそらく、抽象論というレベルではフェミニズムの思潮に最も暗い一人だと思ふ。社会学専攻のくせに論理的な考察や形而上の思索というのがめっぽう苦手で、自分だったらどうか、この議論を自分のフィールドである韓国に即したらどうなるかと、些末で具体的な日常の諸事例にばかり思考が迂回してしまい、大学院のゼミではいつも置いてきぼりであった。やっと自分の意見を披瀝すべく頭の中が整理できたと思えば、頭上を行き来する議論はすでに次なる局面に移っている、といったあんばいだった。この理論に弱く議論ベタという自覚はコンプレックスでしかなかったが、ある時から「私はそういう人間だし、これが私の研究の個性なんだ」と開き直るようになった。以後、事例に重点をおきながら足元から議論を立ちあげていくスタイルが、私なりの研究の定石となったのである。

その意味で「フェミニズムと宗教」とは、自分自身のことを書くというにもかかわらず、わが脳味噌の許

容範囲をはるかに超えるテーマなのだった。だから手際よく自分の考えや思いをまとめることができなかった。そこでいつもやっているように、今度の場合はまず「私」という事例をとことん対象化するしか方途がなかったというわけだ。結果、相当にこっぱずかしい過去の記憶、心に秘めたる古傷(入信の動機の一つとしての「もてる女になりたい」という下心とか)も洗いざらい書くはめになってしまった。関西の大学に在籍していた学部時代、よく当たるといわれた大阪は梅田の占い館で、占ってもらいたい項目のうち「恋愛・結婚」と「仕事」の二箇所に○をつけた覚えがある。あれから二十年近くの月日がたち、こうして一つのテーマを与えられパソコンの前にすわっている、ちよっとトウの立った現在の私。なのに「心身問題」への煩惱だけはあの頃から(ほんの二、三年前まで)一貫し、少しも変わるところがなかったのだという事実、我ながら呆れ驚かされる。これって、いかにもトホホな話ではなからうか？

さて、かの小谷野敦に先立つところ十年以上も前、「もてる」ということを最も切実に欲し、そのからくりを真剣に考察した「もてない男／女」の元祖とは、おそらく作家の林真理子であったに相違ない。ひところはその結婚願望を揶揄され、欲求不満などとおちよく

られたりもした彼女だが、実のところ私は、グラウン・ド・ゼロの「私」から社会のしくみそのものへと思考を立ちあげていくその視線の鋭利さに、いたく感嘆したものだ。彼女はいわゆるアカデミズムの人ではないが非常に鋭い分析家と思われ、理路整然とした（＝理屈っぽい）フェミニスト学者の文体よりは、よほど地に足のついた説得力があったので、私はすっかり固定ファンになってしまったのである。

そもそも何故そんなにまで「もてる」ことに固執するのか、それって男社会への依存ではないの？とか言つて、一部のラジカル・フェミニストは後ろ指をさしたかもしれない。だが「五〇年代に生まれたくせにウーマンリブも、大学時代の女友だちとの会話も、私には影響をあたえなかった」という彼女の場合、そのひたむきなまでの結婚願望は「普通の人の憧憬とは少し違」つていたという。「それでも私は結婚したかった」（瀬戸内寂聴責任編集『あなたへ』講談社、一九九一年一二月）と題されたエッセイで、彼女は「極めてシリアスなものの上に築かれた」自身の結婚観を次のように告白する。

「じゃ、永遠に続く幸福があるんだろうかと、私は胸の中でつぶやいている。どうせ人間は、あと四〇年か五〇年のうちには死んでしまうのだ。どんなに愛し合った男だって、嫌悪し、別れる時が来るといふ事実

を、二十代の私は既に知っていた。それならば人生のうちの二、三年、うんと幸福になった方がいいじゃないか。甘い生活とやらを楽しむのもいい。それが出来るのが結婚なんだ」。

そこで思い起こされるのは、「日の下であなたに与えられたむなしき一生の間に、あなたの愛する妻と生活を楽しむがよい。それが、生きている間に、日の下であなたがたがする労苦によるあなたがたの受ける分である」（伝道の書、九・九）という聖書の一節である。淡々とした日常、悩み多き人の世といった陰画の中に浮かび上がるささやかな幸せの閃光は、つまり「神の賜物」（同、三・十三）にはかならないのだ。なぜなら「ふたりはひとりよりもまさつて」おり、「倒れても起こす者のいないひとりぼっちの人はかわいそうだ」からである（同、四・九・一二）。そうした人生への諦念に裏打ちされた幸福観は、林真理子が語る結婚観とあまりにも似て見えた。「甘い生活とやらを楽しむ」と彼女が表現したことは、換言すれば、平凡で悩みの尽きないそれぞれの人生に添えられた「神の賜物」なのである。要はこれが与えられない場合の「心身問題」であり、そんな懊悩の果てには「神様なんか不公平だ！」などと毒づいてもみたくなるわけ。もともと林真理子の場合、「甘い生活とやら」に対する作家的好奇心もそこには強くはたらいていたことだろう。が、それにし

ても、たとえばシンデレラ・コンプレックスなんていう言葉が揶揄と自嘲を含みつつ流通した八〇年代、そのあまりにストレートな自己開示はかえって世間に誤解され、へ結婚したくてたまらないハイミスといったふうに滑稽がられていたようだ。

九〇年代末に登場した小谷野敦は、いわば林真理子の男版ではないか。フェミニズム的偏見の時代、彼女が明確な言葉で抗弁できなかった「もてない」ことへの私怨、「もてる」ことへの怨望の意味を、彼はすっきりと解きはぐしてくれたのである。何よりも「もてる男」に法界愕気する「もてない男」の登場は、「もてる」こと（その究極の形が「結婚」といえるだろう）への願望、つまるところ「心身問題」の癒し願望が、必ずしも男社会に依存した女たちの専売特許ではないこと、よって、これはもはやフェミニズムの射程からズレた問題であることを、暗示していたのではないだろうか？ まさに、「よくぞ書いてくれました」「よくぞ言ってくれました」の気分である。

かつて私が結婚願望を口にした時、教会の人たちから返された言葉の数々は、どんなに心を尽くし選び抜いたものだったにせよ、結局どれもがそうした——結婚とは女を男に依存させ、追従させるための制度であり、結婚願望は自立できない女が抱く虚妄にすぎない、みたいな——フェミニズム的偏見の文脈に規定されていた

ように思う。事実、彼や彼女たちの助言からは、こんなメタ・メッセージが聞き取れた。

「高学歴の女、自活能力のある女は、やみくもに結婚なんか望むもんじゃない（＝仕事も結婚もというのは欲張りで、ムシがよすぎるんでは？）」。

「それでも結婚したいなら、まずは自分を低くする覚悟と謙虚さがなくっちゃね（＝研究や仕事への執着はあなた自身の肉の欲じゃないの？）」。

「結婚はゴールじゃないし、結婚生活はそれほど甘いものじゃないわ（＝いい加減シンデレラ・コンプレックスは捨てなさい）」。

そこには女が、研究や仕事をすること＝単なる「自己実現」のレベルの話↓この世的な肉の欲、結婚すること＝夫への従順↓忍耐や自己放棄が必要、自活能力があるにもかかわらず結婚したいと願うこと＝男性依存の甘え、要するにシンデレラ・コンプレックス……、という思考のバイアスが明らかだった。

研究という営みを召命と受け止めつつも、それが神から出たものである以上、仮に結婚生活の中で挫折せざるをえない状況に直面しても、これもまた神の召しとして受け入れよう、「主は与え、主は取りたもう」という覚悟は、この時すでに自分の中ではできていた。とはいっても、そういう事態になるかならないかはその時が来て、ふたを開けてみないとわからないわけ

で、少なくとも今は与えられた仕事に打ち込みたい、しかし願わくば結婚後もずつと好きな研究を続けられたらなあ、……こう考えるのは肉の欲で、そんなに罪なことなのか。また三〇代も半ばにさしかかろうとしていた私は、もはや赤い糸の伝説を信じたり、結婚こそ全てと夢見るほどにはウブでなく、ましてやカマトトという柄でもなかった。

私が心から狂おしいほどに欲していたのは、互いの欠点も弱さもいたわり合える人生の同伴者、“そこに共にいる”というそこはかとなない生活のぬくもりだった。そして、どうせ人肌を恋うるならば、私の場合、同性よりは異性の方が嗜好に合っていた。ただ、それだけのこと。

所詮クリスチャンとして人の子、みんな桎梏に充ちた浮世を生き、知らず知らずその時代の思潮に自己の考え方や感じ方を拘束されているのであった（むろん私もそうだけど）。

それまでの胸につかえた哀しみ、まるで地団太踏みたいようなやりきれなさ、ある日牧師夫人が教えてくれた一つの聖句によって、にわかに癒されることになった。すなわち前出の聖書の言葉、わけても「もしひとりなら、打ち負かされても、ふたりなら立ち向かえる。三つ撚りの糸は簡単には切れない」（伝道の書、四・十二）の一節である。これを目にした瞬間、えも

いわれぬ安堵が私を包み込み、ぼろぼろと涙がこぼれ出た。誰が何と言おうと、この私だって素直に「神の賜物」を求めているのだ、と思った。他人が何と言つて非難しようと、神だけはこの私の切なる願いを憐れんでくれる。そして林真理子や小谷野敦がかつて欲した（兩人とも今は既婚者）のも、言葉こそ違え、多分そういうことだったんじゃないかと、今の私は思っているのだ。

教会という場において、慰めは人々の言葉にではなく、その最も根本たる部分（＝神）にあったというわけだ。考えてみれば当然のことだが。以後、私は神に祈りながらの自己決定という原則を措き、かつ人間の言動は時代の文脈という限界を免れないものなんだと割り切るようになった。その意味では聖書もまた、いかに「神の靈感による」とはいつても、使徒たちの手で書かれたものである以上、時代的な制約（性差別的な表現などに反映された）はあつて当然というべきではないか。今更ながらそれを指摘し、糾弾したところではいったい何の得があるのか、と思う。聖書の記述には確かに理不尽さも不完全さもあるだろうが、そうした欠けは、今を生きる私たちの目がそう見させている一風景のようにも思えるし、またかつての時代に制約された聖書記者たちの人間らしさのようにも見える。

そんなわけで、つくづくと「同属である」ことの親しみがわく。

私の夫は反フェミニズムの旗頭みたいな頑固者で、性別役割分担はあつてトーゼン、といった手合いである。このような考え方や態度は、クリスチャンになつてからも一貫している。でも、それだつていいじゃないか、だつて裏返せば、夫の目には私もまた理不尽な存在ということになるわけだし、と思う。夫に従つたから、家事をやったからといって、ナニも減るもんじゃあるまいし（笑つて許してればいいのよ）。要は、妻の意見にも耳を傾けてくれる、また私の心や体が疲れている時などに、家事の手抜きを見て見ぬふりし、時には手伝ってくれるような柔軟さ、そうした優しさが彼の中にあつてくれればよいのである。実はこれが、私が結婚に求めてきた「神の賜物」であつた。

それは男と女が直接に向き合う関係ではなく、それぞれが神を見上げ、キリストの愛を模範とした生き方を求めつつ、神を介して互いに向き合う生活の中で徐々にはぐくまれていくものだと思う。だから私は、夫が「フェミニストであること」を別段望んではないのだ。でも信仰さえ失わないならば、実生活における「宗教とフェミニズム」は実質的にいつかは両立するだろう。結婚して三年目、夫が受洗して一年目の現在は、まだようやくその門をくぐったところにすぎないけど。

女と国家——観念による呪縛

A『古事記』（二四）

河野 信子

若い女 前号（29号）で、対称軸のめぐるしい入れ替りについて、申し上げましたが、これはあくまで「性」を女と男とした場合に成り立つ対称軸でございませう。これが若し女と男と超越性（あるいは無性）の三者の関係ならば、対称軸そのものも成り立ちません。

老婆 超越性ならば『古事記』にすでに書き込まれています。「天地初めて発けし時、高天の原に成れる神の名は、天之御中主神。次に高御産巢日神。次に神産巢日神。この三者の神は、みな独神と成りまして、身を隠したまひき」（倉野憲司校注本 岩波文庫 一九六九年）次のウマシアシカビヒコヂ・アメノトコタチの神も独身。この五種のたちを男としたり、女としたりする仮説を学者先生が提起され続けておられまして、現代でもまだ呪縛されているのでございます。

若い女 三様の性といった考え方を導入してくれば、論理と情念とが往来可能になりますのに。

老婆 「三乗真実・一乗方便。一乗真実・三乗方便」（『法華経』参照）（古来一乗と三乗の論争は多い）というところでしょうか。私はどうも罰当たりな読みをい

たします。觀念界では、人は、思弁の初期から超越性を考えたと見えます。仏教の「變成男子」にしても、「女は男になって女を妻とするべし」など、いうわけもなく「變成無性（超越性）」を男に求め、男が「變成無性」になったのだから、女は「變成無性」になりうる男になれというのでありましょう。修行の条件は「超越性」にありました。ただ、『法華經』には「提婆達多品」が初めから含まれていたわけではありませんので、變成男子も、曲折に富んでいます。

若い女 無性（超越性）を修行の目標とする場に、どのような現実性が潜在していたかはわかりません。しかし29号でも紹介しています片山こずえ氏のこと、雑誌にあつかつてはならぬ「現実」と思われます。

養老猛司氏は、受精卵の性染色体の型をめぐって、XY、XXのいずれにもならない場合があると示されています。X一本だけのXO型（生存可能）（外見的には女性）の場合をターナー症候群。XXY型（クラインフェルター症候群）。Yがあるので外見上はいちおう男性。性染色体の多重化も有りますようです。養老氏はおっしゃいます。（読む）「両親由来の二本のX染色体は、同一座位の遺伝子に関してまったく等しいとは言えない。ということは、どちらのX染色体が不活性化されるかによって、女性の場合には、遺伝的にわずかに異なった、二種類の細胞が存在する可能性が有る

ということである。」（養老孟司『男と女』——人間科学講義第一三回「ちくま」No.346二〇〇〇年一月に所収）
老婆 人類の文化創生期から、三種の性の関係は潜在していたはずです。この種の人々は、あるときは聖職者として、またあるときは、被差別者として「産まざ女」などといった蔑称を受けて来ています。

民族学者セレナ・ナンダの民族調査（『ヒジュラー男でも女でもなく』蔦森樹、カマル・シン訳 青土社 一九九九年）にもヒジュラのことが出ています。外見が女です。しかし、「無性の人」として、慶事を取りおこなったり、娼婦になったりする両極的存在です。去勢された女ではありません。本人たちは、「十中八九生まれつき」だと思ひこんでいるそうです。

若い女 フェミニズムが「女性性」の誇示だけでよしとするわけには、まいりません。

女のしあわせ・私のしあわせ

それどまり

下村恵美子

これは私が周囲の女性たち、ごくフツウに暮らしている色々な女性たちと接して感じた、部分的な局面からの事例であることを初めに申し添えたい。特例なのかも知れないが、事実であることもまた確かである。

「女性問題をやっている人」「やっていない人」というこの言葉ほど私は嫌いなものはない。「女性問題をやっているにも関わらず」とか「ずっと女性問題をやってきた」あるいは「女性問題をやっている人だから」という言い方、言われ方は私の周囲ではよく聞くことである。

女性問題がどういうことであるか知っており、それに関心を寄せて色々勉強もしてきたという意味合いを込めてそう述べているのかも知れないが、そのフリーズが使われる場面では「やっていない」他者に対する差別的な匂いを与え、そこには「女性問題認識のない」というよりはもつとはるか手前の「そんなことをまったく知らない」という大勢の市井の人たちに対する優越感や、差別意識さえも感じることがある。

「女性問題をやってきた私」というのは、単にどこか

でそれに関する講座を受けてこの世の中には女性問題があるという認識を得たに過ぎないという、それだけのことだけだったりするが、彼女たちは一様に「私は女性問題というゆゆしき状態を、本当に困ったものだと思っている、しかしそれを理解していない人たちがいっぱいいて、それには困ったものだと思っている。私は女性問題をやっているから、女性が差別されていることが分かるし、本当にこれは良くないことだと思つて色々人にも言つてみるがナニソレ！ って言われる始末、これじゃあね」という論理を展開するのである。

しかもそういう彼女たちはほとんどが、家庭内では紛れもなく性別役割分担をしっかりと維持しているといふことが多い。無論これから完全に免れ得ている女性などほとんどいないとは思ふけれど……。日々をしつかり性別役割分担で生きている彼女たちが、ちゃっかり性別役割分担を批判する側に回つて、実はそのシステムを強固に守っているという大きな矛盾に目をつむっているという構図に無自覚なのである。

自分をしっかりとガードして、その矛盾点を指摘すると、とどのつまりは能力のあるなしに置き換えて自分はそういう能力が備わっていないから、これでいい、これしかないと弁明する。本当は自分がどうありたいか何をしたのかということに、目を向けようと

しない。

女性問題とかジェンダーとかに精通していることが、女たちの間で権力をもってしまふことになるのだろうか。それを知った女たちは、知らない女たちを知らないのは困ると言えるのだろうか。本当に精通しているなら、そのような目線は働く余地はないはずである。「女性問題をやっていない女たち」も等しく解放されていくものだということに優しい眼差しを向けられないのだろうか。そのような狭量さは残念ながら、学んだとされる専業主婦たちに多いのは哀しい。

今も専業主婦のありようは女性問題の原点になる問題として、多種多様に語り続けられてきている。しかし最近各地に女性センターができ、そこでは専業主婦としてのあなたを責めているのではありません、専業主婦という制度そのものを問題点にしているのです、という言説に安堵した専業主婦たちは、実に生き生きと「活動」をしているのである。しかも「女性問題をやっている」立場を標榜して…。

そう簡単には男の生き方、働き方は変わりそうにもない。そこに確たる見通しをつけているからこそ、自分の生き方を容易には変更しないことにも理由がつく。働こうと思ってもそう簡単には働けないという言い方で、だって私には家にいるしかないからという言い方で…。

仕事に専心できる態勢を手にする男たちの状況は、仕事をしている女ならそれを少しでも味わうと一種の「醍醐味」に感じることであり、結婚して子どももち、そのうえに仕事をする、あるいは研究するなどというのは女にはサーカスの玉乗り以上に厳しいのである。だから結婚して細々と家庭内責任を負うよりは自由に生きていきたいと言うシングルや、対等合併型の事実婚を選ぶという人が私の身近にもふえてきたことはうなづける。

先端の流行の衣服を身にまとうのはいいし、美しくお化粧するのもいい。しかし娘の里帰り出産、お盆の支度や采配、夫の食事の用意と買い物など色々な家庭内の仕事を一手に万端こなし、女性センターには息抜きに、あるいは義務で来ているとしか思えないような人が結構いる：ように私には見える。それも「やっぱこれは母親である私の役目だから」と「女性問題をやっている」と自認した上できちんと言い切ってくれるのである。

もう何をしても世の中は変わりそうにもないと早々に結論づけたり、なんのかんのと言っても結局女には限界がある、ましてや専業主婦になっている自分には、どんな道へのトライが可能かなれば、現状の安定と幸せを維持しながらなおかつ、「○○さん」と固有の名前で呼んで存在を認めてくれる世界、「女性問題をやっ

ている世界」に息抜きにいくのは、やはり貴重な機会であり場であり、快適であり、女役割をまたいで来られる幸せでもあるということになる。

ではなぜそれを問題として私が指摘しないかとなれば、まず、女性が女性問題を学習する現場にいて、ほとんどの人が自分の負っている女性問題を棚に上げて、他者のありようを糾弾するという形で学習が終わってしまうような、そういう学習の提供をしている限界を乗り越えられないでいるという、こちら側の問題があるからである。

しかもこちらがフェミニズムを真正面から取り上げるのは悪くて、性別役割分業の問題性を取り上げるならいい、というようなねじれた考え方をしていることも問題である。問題の根っこを押さえることも、現役世代の働く女性や男性にメッセージすることもなく、時間があって出かけやすい主婦がお勉強にくるという状況を是として、学習を提供していることにも問題がある。

しかもたいていは学習の内容に関しては実質的には学識経験者とか有識者とかいった、専門家に委ねられているから、女性たちにしてみれば「教えて頂く」にふさわしい立派な人たちから、目のウロコを落としてもらって、そこで語られることはほぼ「正しい」と信じ込まされてしまうようなそういう知識の下り方が避

けられないからである。

こうした学習のありようは、残念ながら従来、既存の男社会のやり方の踏襲そのものでしかないと思う。現在、学校と冠されているところでの学習というのは、ほぼ知識の授受形式が主流なのではないか。その影響がバカにできないほど、社会教育の場における学習のスタイルは固定的である。現実を生きる人たちの現実場面から、問題を立ち上げるのではなく、講師として呼ばれてきて、物語る彼女彼ら専門家という人々は、フェミニズムを軸として、そのスタンスに多少の揺れ幅はあるにしても、自分の専門領域の持論の展開しかしていかないのである。

こうした限界が超えられない自分がここにいて、どんなに「女性問題をやっている私」が「やっていない人は分からなくて困る」と嘆いても、ああまたか、いやだなあと思うだけで、言葉の交差しないもの同士で、バラバラな状態で女たちを「啓発」している罪は深い、とまず私自身を切っておきたい。

私の現在の努力目標は女性問題を本当に学ぶ、学んで力を貯める、そういうことができるようなプログラムを作ることにある。自分の女性問題を語ろうとしない講師、知識を保有しているものと、していないものとの間に働く力関係、なんだ結局は男の世界の模倣じゃないかと思われる女性の団体活動など、色々

な場面を見ると、「女性問題をやっている」女性たちがそれをアクセサリにしたとしてもそれは責められないということである。

性別役割分担の解消などということは難しい。しかしそれで成り立っている「私の幸せ」をアクセサリなどと交換出来るものではない。それほど強固で揺るぎない女性問題が脈々と根を張って引き継がれている。それに切り込むための自分の持ち得ている方策はただ一つ、自分がフェミニストかどうかを自分に問い、もしそうであるなら自分に一致させる努力をすることかと思う。少し前まで私は自分はフェミニストではないが、フェミニストでありたいと言っていた。この言い方はもうよそうかな…と思いい始めてもいる。

本の紹介

女性問題を学ぶ

—ある自治体のこころみから—

下村美恵子著 新水社

足立区女性総合センター社会教育指導員の著者が、「女性問題」を学ぶことの問題点やこれからの課題を考察したもの。次のような目次が、本書の内容を簡潔に

伝える。一、「女性大学」をふりかえる。二、女性問題学習の問題。三、アンケートから。四、女性問題学習を越えてである。

著者は、講座に関わる人々の意識にも問題があるとする。提供する側の「センターの職員」の人権意識、専門性の欠如。一方、「受講者」の単に知識人の話を聞くことで「勉強した」と満足し、それ以外の関わりを拒否し、自分自身に問題を引きつけようとしないうび方。また、「これから論じる点」とされているが、専門家とされる「講師」にも自分の生き方とは離れたところで「女性問題」を講義している人もいるのではとある。

講座運営や女性問題を学ぶことについての本ではあるが、そこに描かれている日本の女性の現実、私が考えていたよりはるかに厳しく、そのように女性に要求し、女性もそれに抵抗するのではなく、いまだ応じてしまっている「社会状況」、それなのにフェミニズムが受け入れられない現実には、ただただ「う——ん」。

勿論著者も、だからこそ悩んでいるのだ。講座で実際扱っているのは「フェミニズム」なのに、「女性問題」と言わなければならないことで、失ってきたものにも言及している。また、「フェミニズム自体、この言葉を発するだけで怖い、恐ろしいと揶揄されて受け取られてしまう現実」(おお!)ばかりか、最近「ジェンダーフリー学習」、「男女共同参画学習」というようなあい

まいな言葉の多用が、「難しいことは言っていないで、男も女も一緒にやっついこうというような、乱暴な誘導にも聞こえかねない」ことへの不安、それを共有する自治体職員が少ないことにも著者は、苦しんでいる。

しかし、著者のような誠実なフェミニストが関わっていること、二〇回以上の講義が半年にわたる「女性大学」を、一五年間に六〇〇人もの人々が受講したという事実は、やっぱすごい。

何より、「女性性器の切除の問題も、それと対比して自分がいかに幸せかを実感するのでもなく、重たい事実を知ってどう自分がそれを引き受けていくかを考えることになる」ような人間のあり方へのエンパワーにこの本がなりますように。

(H)

光州事件で読む現代韓国

真鍋祐子著、平凡社、二〇〇〇年、二、五〇〇円

とても近い国であるにも関わらず、ほとんどその実情をしらない国、韓国。一九九七年の金大中の大統領当選と、二〇〇〇年総選挙における落選運動、そしてつい最近の南北対話の始まり、といったニュースを目にしたばかりだが、そうした政治的動きを、光州事件とそれに関わった人々の運動の視点から描き出そうと

した意欲的な本である。その光州事件で死亡した多くの一般人の「冤魂」を求め、人々は聖地光州へ巡礼し、コミュニティスを作り上げる。光州事件を追体験する中で、悲嘆の民情が揺さぶられる。民衆詩がうたわれ、運動歌謡が口ずさまれる。そして、人々は「恨が解かれた」しるしとして「統一祖国」への思いを沸きあがらせる。こうした光州事件の語り部である五・一八世代が、九〇年代そして二〇〇〇年の韓国の政治を引っ張ってきた。そしてさらに、金大中後の民主化への運動が始まりつつあるという。専門家でもない私にはとても重い本であり、肝心な点を見逃しているかもしれないが、民主主義を求める動きと民族ナショナリズムの融合された運動の熱気が伝わってくるように感じられた。崇りを恐れて鎮めようとする日本と、恨を解くために現状を、そして現政権を批判していく韓国の烈しさに、近くて遠い国を思う。

(小松加代子)

「日本」国家と女

井桁碧編著（奥田暁子、片野真佐子、加納実紀代、前山加奈子、石塚友子、山下英愛、樫村愛子、大越愛子）青弓社、二〇〇〇年

近代国家は、少なくとも編成過程の初期においては、国家の意志を決定し体制を維持する装置・領域から徹底

して女を排除した。女たちは、そうした近代の「国家」「民族」とどのように関わったのだろうか。

編者の意図は、政治・経済的支配階級の男たちが客体として女をどのように操作したのか、知識階級の男たちが女について何をどのように主題化し言説化したのかではなく、女が自らを「性」主体としてどのように編成したのか、その痕跡を、「日本」という国家の成立・展開過程と関わるものとして主題化することにあつた。この企図は、依然として自明視されている「日本」「日本人」が、「国家」「民族」というカテゴリーを支持するイデオロギーと制度が、どのような権力関係のなかで編成されてきたのかを検証することによって相対化したい、国史としての「日本史」を補填もしくは相補する「女性史」という発想を脱構築したいという願望に発している。

幸運にも、こうした企図、願望を実現するその第一歩を、「大日本帝国」内部で「国民」化する女たちを論じた第一部、そして中国大陆、台湾、朝鮮半島といった、帝国日本を外部から来る侵略勢力として受けとめねばならなかった地域の女性たちの「性」認識と実践の軌跡を析出した第二部、「国民」化とは別の「性」主体編成の可能性を模索した第三部、それぞれ担当者たちの協力を得て、踏み出すことができた。

本書は、奥田暁子編著『マイノリティとしての女性史』一九九七年、近藤和子編著『性幻想を語る』一九九八年（ともに三一書房）に続くべきものとして企画されたものであり、併せてお読みいただければと思う。

（井桁 碧）

現代フェミニズム思想辞典

ソニア・アンダマール他著 奥田暁子・樫村愛子
金子珠里・小松加代子訳 明石書店 二〇〇〇年

一九六〇年代、七〇年代のいわゆる「草の根」フェミニズムに親しんできた人びとには、最近のフェミニズムは理論中心で、ひどく難解であると評判が悪い。難しい理論は学者に任せて、もっと実践的なフェミニズムをとという声も聞かれる。しかし、たとえば、戦後五五年間に戦争・戦後責任について多くのことが語られ、論争が行われ、その中で思想が深まってきたように、理論化は決して否定すべきことではない。フェミニズムの場合も、過去三〇年間の女性たちの経験や論争が蓄積された結果が今日の理論となったのだと考えることができるだろう。というわけで、本書は「辞典」ではあるが、単なる用語の解説ではなく、現在問題になっている論争点や議論を紹介することに重点が置かれているので、フェミニズムの現状を多角的に知ることができる。少々難しい説明もあるが、西欧のフェミニズムに偏ることなく、マイノリティ女性の思想にも十分目配りがなされており、思想や理論が生み出されたプロセスを理解することもできる。（奥田暁子）

編集後記に代えて

読んだり、見たり、信じたり

――夏の思い出から――

全集の第二期刊行が現在中止で、干刈あがたが忘れられていくのでは、と心配していた私だが、この夏、冥王まさ子の「南十字星の息子」（河出書房新社）を読んだ。原真佐子という名で、「狼と駆ける女たち」（新潮社）の翻訳も。九五年に亡くなられているが、この作家も忘れられないで欲しい。

フェミニズムが、若い女性からは恐いものとされていると聞く。でも、現在に生きる人間にフェミニズムという思想は不可欠。それを考えない人は、女でも、男でも、年とっていても、若くても、面白くない人、不誠実な人、愛さない人、考えのない人、でしょ。

「フェミニズム・サブカルチャー批評宣言」（春秋社）の著者、村瀬ひろみは六六年生まれ。アニメ論のアニメはほとんど見たこと無かったが、すごく面白い本だった。マッキノンについての書き方には、もう少し注意が欲しかったが。『女』であることがどこかで挫折の念にとって代わるような、そんな世界はもう嫌だ。私も『世界を革命』したいのだ」と。そうだよ！元気でいこうね。

で、フェミニズムを考えられる男は、やっぱり素敵だと思ったのが、「異郷界家族」（集英社）。著者の森巢博は、国際博奕打ちとか。フェミニストに似てます。少数者として、負ける可能性が多い世界をスリルに満ちて生きてるからね。小林よしのりを初めてとする日本国家主義者を斬ってくれているし、彼のフェミニズムを実践する日々がすごく楽しいそうなこと、うれしい。

最後に映画。ドキュメンタリーの「笑顔と告発」。一〇年間この問題を追いかけた本田孝義監督は三二歳。映画館に置いてあつたちらしに「新井さんは語る、新井さんは笑う、新井さんは反抗する、新井さんは信仰する、新井さんは自転車に載る、新井さんは歯を磨く、新井さんは科学者として逃げない」とあつた。「信仰する」にひかれて見た。

新井さんは自分の職場（国立の研究所）で告発をする時、学生時代に洗礼を受けたあと長く離れていた教会に戻った。小さな部屋での祈りの集会は、一緒に祈りたい、と思わせてくれる力強さ、純粹さがあつた。国立研究所の副所長が、調査書類のサインを捏造するという信じられない出来事も撮られている。秋には再上映があるとか。主役の新井さんがなかなか素敵で（私の男性観ですが）すごく楽しい映画なので是非見て下さい。

（山下 暁子）

生命の始まりと終わり

水子供養は七〇年代から八〇年代をピークとする新宗教だと主張する人もいる。その原因解釈にはさまざまな意見が出され、また実態調査も一部行われている。

出産に到らなかつた胎児への懺悔と供養は、日本の民俗的な「たたり」の考え方と結びついてはいるものの、この現代の流行にはいくつかの要素が絡んでいる。主婦が一般化し、同時に母性信仰ともいふべきものが広がることによって、子供を持つことが女性本来の働きであり、喜びであると考えられたこと、宗教団体にとって収入をもたらすものであったこと、そして中絶が急激に減少し、一気に中絶経験者は少数派へと変化したことなどがあげられる。

水子供養が中絶を経験した女性の苦しみを癒すという側面を持つことは否定できないが、しかし、それは性別役割を明確にした家族観・母性観に彩られた女性の生き方を超えない範囲での解決にすぎない。女性の苦しみに対して、別の解決策が存在しないという、初めから選択肢のない筋書きであるように思われる。それは、その根底に中絶そのものの価値づけの問題があり、ひいては生命の起源をどこに置くかという問題につながっている。中絶を罪悪視する観点の立脚点は、

胎児は生命であり、生命の始まりは受精にあるので、中絶は殺人だという考え方である。

ここに別の考え方がある。シャーリー・マクレインの著作などによって、日本にも入ってきたニューエイジの思想である。ニューエイジ思想のほとんどは輪廻を説いている。それによれば、人は魂の成長のために何度も転生しているという。ある人生が終わると、死後の世界でその人生を反省し、おろかだった自己を矯正するために、次の人生に向けてプログラムを組む。この考え方によれば、魂が生まれるべき時とその親を選ぶのであり、通常考えられているように親が生まれる子を選ぶのではない。そして、魂は誕生の瞬間に肉体に入るのだという。とすると、魂が肉体と一体となった時こそが、生命の始まりというにふさわしい時なのだということになる。また、一部には、魂は心臓が停止したときに抜け出るので、脳死による移植は殺人であると反対する人もいる。

魂が入る前の中絶は問題ないとなると、安易な中絶が増えるという反対意見が出てきそうだが、その反対意見には中絶で苦しむ女性たちへの思いが欠けていると言わざるを得ない。それはさておき、生命の始まりと終わりに関して科学や医学に依存したままで、宗教的な説明をしない宗教団体や宗教思想が多すぎるように思えるのだが、いかがだろうか。（小松加代子）

セクシュアル・ハラスメント裁判を支援する

本会のメンバーである渡辺典子さんのセクシュアル・ハラスメント裁判については、ご存じの方も多いと思いますが、簡単に説明すると、渡辺さん（浄土真宗本願寺派光西寺副住職）が常任委員として出席していた本願寺派東京教区の協議会で二人の男性委員から性的な暴力を受けたとして、提訴した事件です。この問題に関しては、フェミニズム・宗教・平和の会のメンバーの中にもさまざまな意見があるようですし、暴力行為の有無が問題になっているとも聞きます。しかし暴力行為があったか無かったかということは裁判の中で明らかになって行くでしょう（判決は九月二九日）。わたしが渡辺さんを支援しようと思ったのは、このような事件は本人の言葉が一番正しいと信じるからです。裁判に勝つというはつきりした見込みがない段階で、敢えて公にすることは、とても勇気がいることです。一般に性暴力を受けた被害者がすぐに行動に移せないのは、公にすることによって中傷や誹謗を体験し、よりいっそう大きな心の傷を受けるからだと言われています。

横山ノックの問題に関しても、被害者を批判した曾野綾子のような人がいましたが、あのととき、被害者の

女性が勇気を奮って告発しなければ、ノックが大阪府知事を辞めることはなかったでしょうし、これからもこの国の男性の性意識が変わることもないでしょう。「慰安婦」問題に関して日本の性風土の特異性が云々されるように、たとえば明治のエリート男性の行状を暴露した『蕃妾の実例』（黒岩涙香著）などを読むと、この国の男性の性意識の下劣さに唖然とさせられます。そしてそのような男たちの性行動を黙って受け入れ、表面的には安泰な家庭を維持したのが「賢夫人」と言われる女性であつたわけですから、ある意味では、女性も共犯者だつたということになります。

セクシュアル・ハラスメント裁判はこうした性風土に一石を投じて、さざ波を起こす役割を果たしています。今はまださざ波であつても、それがいくつも集まれば大波となるかもしれません。女性たちがはつきりノーと言つて立ち上がることはとても大切なことです。そのためには、勇気を出して立ち上がった女性を支えていくことが不可欠だとわたしは思っています。

今号は前号に引き続いて「フェミニストにとつての宗教」を特集しました。初めて書いてくださった方もあり、新しい視点が付け加えられたと思います。「編集後記に代えて」は、予定していた原稿が集まらなかったため、頁を埋める意味で、編集担当者がそれぞれ自分の関心事を書くことにしました。（奥田暁子）

Womanspirit No. 30

2000年9月発行

発行 フェミニズム・宗教・平和の会

連絡先 〒180-0014

武蔵野市関前5-5-25

T／F 0422(53)8746

E-mail Akikovv@aol.com

郵便振替 00170-9-8031

定価 700円

印刷 (有)オクノプリント社